

保育者養成課程の乳児保育における 「ふれあい遊び」の意義と学び ― 保育実習Ⅰ（保育所）の実践体験に着目して ―

上 原 由 美

The Significance and Educational Value of “Fureai Play” in Infant Care in the Nursery Teacher Training Course ― Focusing on the Practical Experience of Childcare Practice I ―

Yumi Uehara

I. はじめに

乳児保育の需要の高まりとともに、保育者養成機関においても即戦力となる新人の育成が強く要請されている。保育者養成課程では、乳児保育の充実及び幼児教育の実践力の向上、子どもの育ちや家庭支援の充実、保育者としての資質向上という方向性が示され、これまで以上に多岐にわたる専門性の向上が求められている。

また、平成29年4月に告示された保育所保育指針において、保育所や認定こども園についても幼稚園と同様に、大切な幼児教育施設として位置づけられた。養護と教育が一体となった保育を展開していくことが求められ、0歳児から5歳児の育ちや小学校を見通して育てていくという姿勢が示された。乳児期の遊び「ふれあい遊び」を例に挙げると、その遊びの中には、体を伸び伸びと動かす（健康）、保育者と十分に触れ合う（人間関係）、機嫌よく喃語を発する（言葉）といったように、5つの領域が密接に関わっており、複数の育ちの要素が含まれている。5領域に分化する前の未分化な乳児期の育ちの3つの視点「健やかに伸び伸びと育つ」「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」について、どのように乳児に働きかけたり、配慮したりするべきか、保育者養成課程の「乳児保育」においても、しっかりと学生に教授する必要がある。「乳児保育」の授業での学びを踏まえ、実際の乳児と触れ合うことのできる保育実習において、保育者から指導を受けながら直接乳児と関わり「ふれあい遊び」を体験することで教育的価値が期待できるのではないかと考える。

「ふれあい遊び」は、大人と幼児及び乳児、あるいは幼児同士で、スキンシップを図りながら楽しむ遊びである。久津摩（2013）¹⁾は、赤ちゃんは、大人に触ってもらったり、うたってもらったり、遊んでもらうことが大好きで、肌と肌をふれあって遊んでもらった記憶は、大切な心の栄養となると述べている。また、赤ちゃんはどんなに文明や科学が進化しても人が関わらなければ成長できないとも論じている。遠藤（2016）²⁾は、身体がまだ小さな乳児は、間近でかかわる大人の歌声を聴き、表情を見て、

手足や身体全体にリズムの刺激を受け止めるため、「ふれあい遊び」は、動きの面白さ、リズムに合わせて身体で表現する楽しさを知る身体表現の基礎的体験となり、関わる人との関係を広げる豊かな交流の機会ともなると述べている。これらのことから、「ふれあい遊び」は、乳児の人間関係を広げ、身体表現力、言葉の獲得、情緒及び運動面の発達にもつながり、ふれあう大人との信頼関係を築く上でも重要な遊びであり、保育を志す学生は「ふれあい遊び」について理解を深め、その引き出しや実践力、表現力を培う必要があると考える。

佐々木 (2007)³⁾ は、乳幼児への好意感情と育児への積極性からなる親性準備性尺度を作成し、青年期の未婚男女を対象に調査を行い、乳幼児との接触体験は、積み重ねや関係性の構築により、親性育成に肯定的に影響していることを明らかにしている。学生の中には「赤ちゃんが可愛い」と思う気持ちから、乳児に魅力を感じ保育者を志したものもみられるが、保育実習を通して「赤ちゃんが可愛い」と思う気持ちだけでは保育の仕事は厳しく、乳児との関わり方や配慮等 お世話の大変さを痛感する。しかし、数日間一緒に過ごし関わる中で、人見知り時期の乳児との距離が縮まり嬉しさや乳児への深い愛情を味わい、その体験からしっかりとした意志をもち進路決定するものもみられる。

そこで本研究では、保育者養成課程の「乳児保育」で習得した「ふれあい遊び」について、学生が保育実習において実践し、子どもとの「ふれあい遊び」を通してどのようなことを体得したか探ると共に、その結果から、「乳児保育」の授業における「ふれあい遊び」の意義について検討することである。さらに、実習前後において学生の乳幼児への好意感情がどのように変化するか明らかにすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 調査対象者

保育者養成校N県S大学短期大学部 保育士資格取得を目指す幼児教育学科2年生120名（女性114名、男性6名）を対象とした。

2. 調査時期

調査は2022年8月下旬から2022年10月中旬まで期間を設け回答を求めた。調査回答期間が夏休み中であったため、115名（回答率96%）から有効な調査回答を得た。

3. 調査手続き

アンケート調査については、Webアンケート作成ツール（Google Forms）を用いて、同意の得られた学生のみ協力を求めた。所属大学の倫理審査委員会の承認（承認番号202201）を得て実施した。なお、文中の写真や作品の画像についても承諾を得て掲載した。調査項目には自由記述も含まれており、協力者の記述に含まれる語を抽出し、樋口 (2014)⁴⁾ の計量テキスト分析を行うためのアプリケーションソフトであるKH Coder (ver. 3) を使用し分析を行った。本研究では、山本ら (2021)⁵⁾ 山内ら (2022)⁶⁾ を参考に進めた。

4. 調査内容

調査内容は、保育実習前後において、佐々木 (2007) による乳幼児への好意感情と育児への積極性からなる親性準備性尺度のうち、乳幼児の好意感情尺度に着目し9項目の質問に対して1「全くそう思わない」～5「とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。また、保育実習後では、総実習日数と0.1.2歳児クラス（3歳未満児）での配属日数、さらに、「ふれあい遊び」の実践体験に関する質問項目について加えて自由記述で行った（資料1）。

Ⅲ. 保育実習Ⅰ（保育所）期間

保育実習Ⅰ（保育所）については、例年は1年次2月下旬から3月上旬に実施となるが、2021年度入学生については、新型コロナウイルス感染拡大に伴い2年次の夏休み期間【2022年8月22日（月）～9月2日（金）】に変更となった。実習について夏休み期間に実施したが、この時期も新型コロナウイルス感染拡大のため期間変更や延期、一時中断等があり、10月初旬まで実習を行っていた学生もみられた。

Ⅳ. 「乳児保育Ⅱ」授業概要

1. 対象科目と対象者

対象科目については、2022年度前期開講科目「乳児保育Ⅱ」であった。受講学年と人数については、2年生123名（保育士資格取得を目指す3名の学生も含む）。

2. 「ふれあい遊び」についての演習内容

2022年度前期授業について、本学では新型コロナウイルス感染対策として、登学する学生人数を1/2に削減し、遠隔と対面の形態で授業を実施した。「乳児保育Ⅱ」は演習科目であるため、対面受講では沐浴の仕方、調乳・授乳の仕方及び模擬保育などの実践学習を行い、遠隔受講の際は、課題学習として予めClassroomに課題を設定し、学生は自宅で課題に取り組んだ。「乳児保育Ⅱ」授業回数15回のうち、「ふれあい遊び」に関する授業内容は実質2コマ分(180分)であり、その2コマについて研究対象とした。「乳児保育Ⅱ（演習）」の授業時間配分を表1に示す。

表1. 授業の時間配分

授業回数	対面「実践学習」の内容	遠隔「課題学習」の内容
第4・5回	調乳、授乳の仕方について 保育者の「ふれあい遊び」動画の視聴（30分）	DVD「環境構成の理論と実践」視聴 視聴後「乳児を受け入れる基本の環境」「0, 1, 2歳児の保育環境について」レポートにまとめる
第6・7回	衣類の着脱の仕方について 沐浴の仕方について	「ふれあい遊び」調べ学習の課題（90分） ① ふれあい遊びについて調べ、1つレポートにまとめる ② レポートにまとめたふれあい遊びの実践 (ふれあい遊びを実践し撮影動画をScrap BOXへURL添付)
第13回	0.1.2歳児の子どもの発達について復習 (保育実習Ⅰ(保育所)事前学習) 0.1.2歳児向けふれあい遊びのふり返し学習（60分） (代表者による実践・紹介)	Zoomで受講

第4・5回の授業内容は、主に「調乳・授乳の仕方について」の実践学習であったが、後半30分の授業時間で、「保育者が子どもとふれあい遊びを楽しむ姿」の動画を視聴した。この動画は、実習で毎年お世話になる近隣のこども園（愛泉こども園0歳児クラス）、そこで働く本学卒業生の姿が映し出される。学生が身近に感じ、0.1.2歳児クラス担当保育者や将来の姿をイメージしやすいからである（写真1）。

第6・7回の授業内容については、前回の授業で視聴した動画を踏まえ、各自「ふれあい遊び」の調べ学習を行った。学生自身が実習において、実際の子どもと実践したいと思う遊びを1つレポートにまとめた（図1）。レポートをもとに、自宅にあるぬいぐるみやクッション、枕などを子どもに見立て「ふれあい遊び」を実践し、動画撮影した（写真2）。その動画URLを課題として提出した。この工程では、

Nota Inc.が提供するオンラインで複数人が共同で同時編集をしたり、URLを使って内容を共有したりすることができる「Scrap Box」を利用した(図2)。

第13回の授業では、保育実習(保育所)Ⅰの事前学習として、これまで学習してきた「0.1.2歳児の子どもの発達」「0.1.2歳児向けふれあい遊び」についてふり返しを行った。「ふれあい遊び」は、代表者が実践し、その後、他学生が質問や感想を述べるなどの意見交換の時間を設けた。代表者の実践する姿を見ることで、保育の引き出しが増え、また、保育実習Ⅰ(保育所)でどのように活かすか、さらに、自分の選んだ「ふれあい遊び」は月齢や年齢にあっているかなど、学生自ら能動的に学び合える時間となるよう配慮した。



写真1. 動画「保育者が子どもとふれあい遊びを楽しむ姿」の一部画像

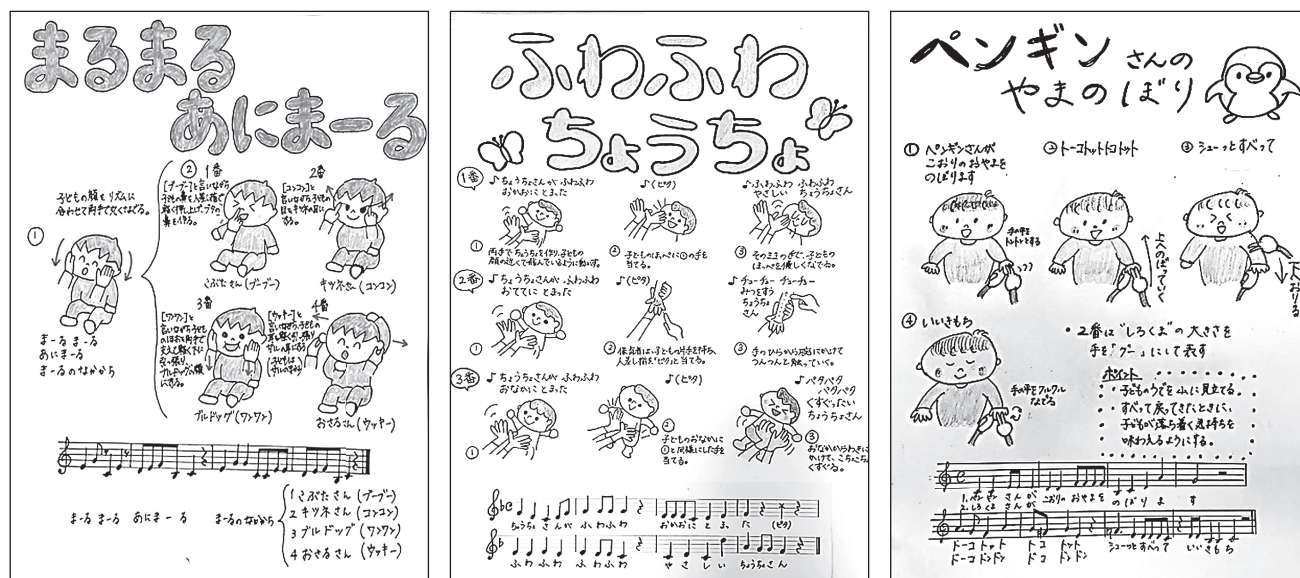


図1. 学生の「ふれあい遊び」レポート画像

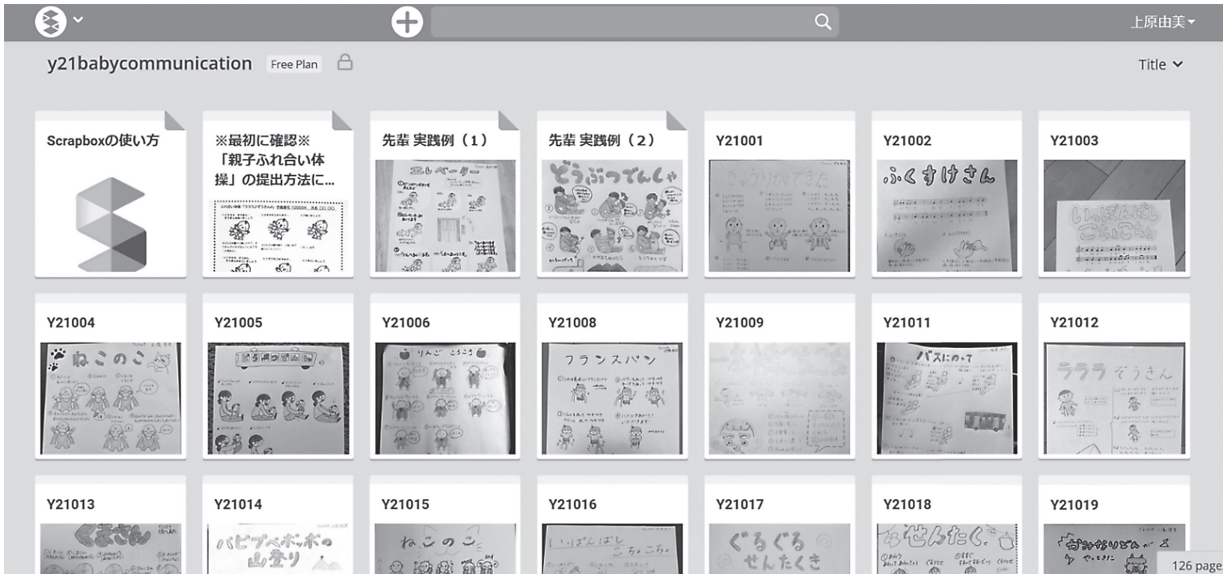


図2. Scrap Box 個人ページ「ふれあい遊び」提出レポート・実演動画URL

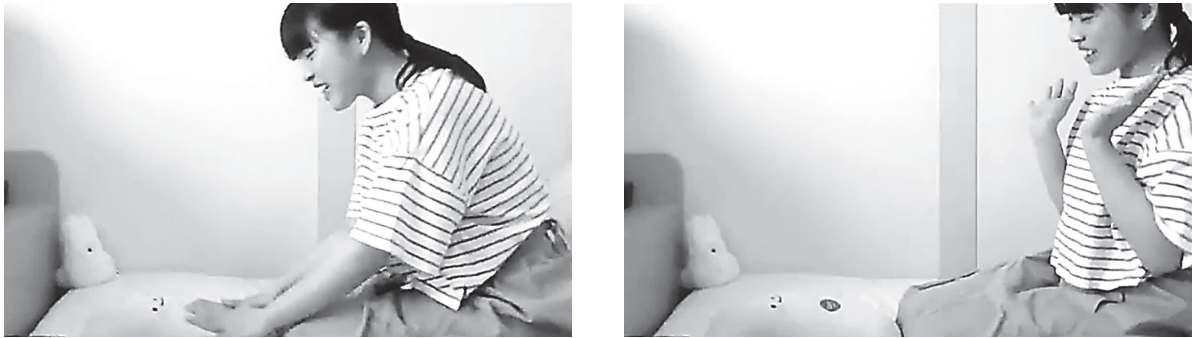


写真2. 学生の「ふれあい遊び」実演動画の画像

V. 結果と考察

1. 保育実習Ⅰ（保育所）前後における「乳幼児への好意感情」の変化

保育実習Ⅰ（保育所）の前後における「乳幼児への好意感情」9項目（資料1【質問1参照）それぞれの回答をあわせた結果について図3に示す。「乳幼児への好意感情」は、保育実習前より保育実習後の方が有意に高まった。0.1.2歳児クラスでの実習を体験することは、保育を志す学生にとって有意義であることが示唆された。

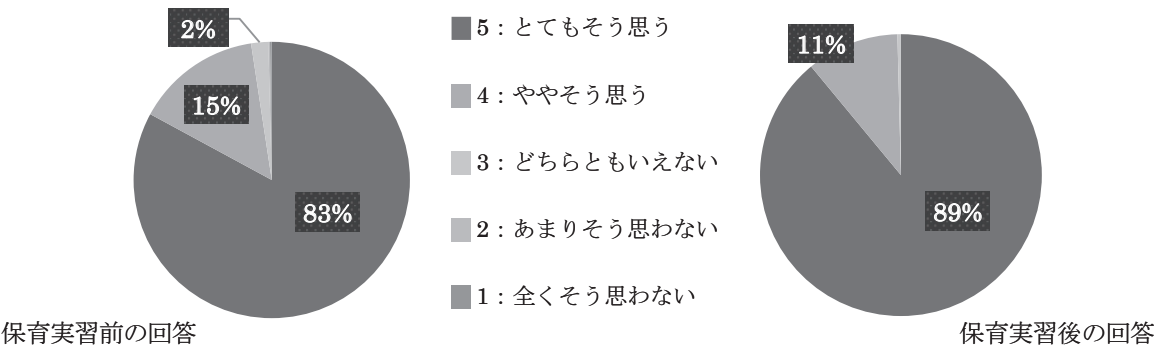


図3. 保育実習Ⅰ（保育所）前後における「乳幼児への好意感情」の変化

2. 保育実習Ⅰ（保育所）で「ふれあい遊び」を実践したかどうか

「0.1.2歳児の子どもと「ふれあい遊び」を実践したかどうか」の質問について、「実践した」と回答したものは60%、「実践しなかった」の回答は39.1%であった。「計画して実践したわけではなく、自由遊びの時間に、スキンシップを取ることができた子どもに少し触れ合い遊びを行った。」という回答も1件みられた（図4）。0.1.2歳児クラスでの「ふれあい遊び」は、実際の保育現場において保育者がねらいを立て一斉活動として計画的に取り入れる場合もあるが、ほとんどの場合は一斉活動として計画的に行うものではなく、時間や場所を設定せずに自由遊びや生活の流れの中で、子どもが保育者に一对一の触れ合いを求め膝の上に座ったり、抱っこしてきたりした際にする遊びである。「実践しなかった」学生の中には、計画的に実践しなければならないという思い込みから実践しなかったことも推測されるため、授業の中で「ふれあい遊び」の意義について、しっかりと教授することが必要であると考えられる。

「ふれあい遊び」を「実践しなかった」39.1%の学生に、その理由について選択式（複数回答可）で回答を求めた。選択理由は7項目設け（資料1【質問3】-3）参照）、理由が7項目に該当しない場合は「その他」に記述式で回答を求めた。図5が結果である。一番多かった回答は、「クラス担任保育者にお願いできなかったため」の34.9%であった。初めての0.1.2歳児クラスでの実習のため、自分から意欲的にクラス担任保育者に申し出ることが出来なかった消極的な学生の姿が読み取れる。続いて「コロナ禍で、必要以上に子どもと密着することができなかったため」の32.6%であった。コロナウイルス感染対策として、実習生の立場を踏まえ、必要以上に密接に関わらないよう実習園からの指導があったことが窺える。23.3%の学生は「人見知り時期の子どもが多くなかなか一歩踏み出せなかったため」の理由を選択していた。0.1.2歳児クラスでの配属日数が少ない上、初めての保育実習ということもあり、人見知り時期の子どもに上手く歩み寄れなかったのではないかと示唆される。18.6%が「調べたふれあい遊びが、配属クラスの月齢や年齢に適していなかったため」、「自分の表現力やコミュニケーション力に自信がなかったため」が11.6%、2.3%が「保育者の前で実践することが、ただ単に恥ずかしかったため」の理由を選択していた。「ふれあい遊び」は機転を利かせれば月齢や年齢に関係なく実践可能である。その保育スキルを磨くためには、実際の子どもの介して、経験や場数を踏むことが重要である。また、表現力の自信なさや恥ずかしい気持ちについても、克服するためにはどのような指導が効果的なのか検討していくことが今後の課題である。

その他の回答の中には、「歩くことが楽しい時期で、子どもの活動が止まっていることが少なかったため。」「触れ合い遊びを取り入れるタイミングが見つからなかったため。」「ほとんどが外遊びで、ゆっくりお部屋で遊んでいる時間が少なかったため。」「ふれあい遊びを行う時間が取り入れられていなかったため。」などの回答がそれぞれ1件ずつあった。

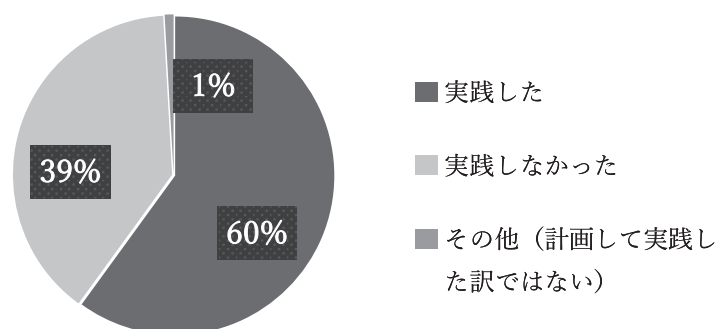


図4. 0.1.2歳児の子どもと「ふれあい遊び」を実践したかどうか

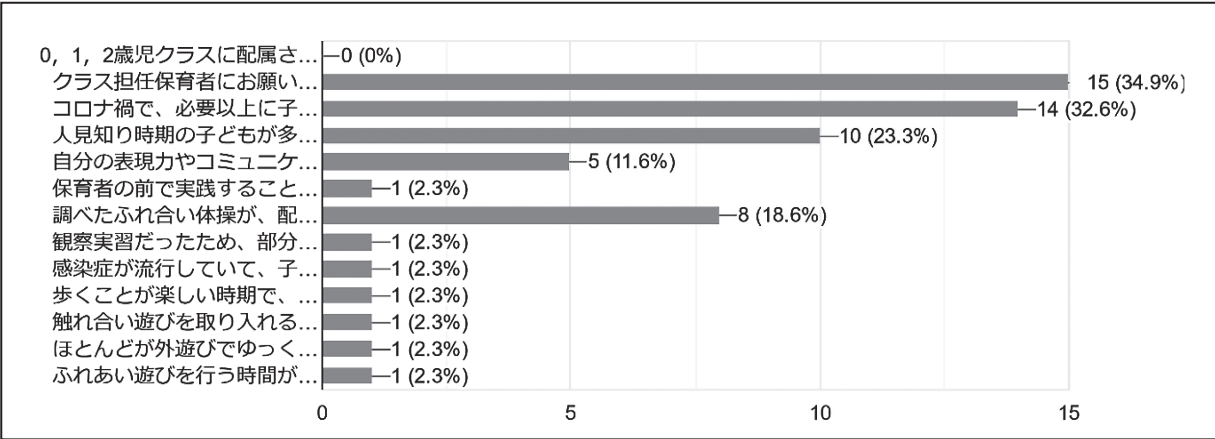


図5. 「ふれあい遊び」を実践しなかった理由について（複数回答可）

3. 保育実習Ⅰ（保育所）で「ふれあい遊び」を実践し体得したこと

保育実習Ⅰ（保育所）での実践体験から、乳児保育における「ふれあい遊び」の意義を探るため、どのようなことを体得したか、子どもの様子や反応、実践する際の留意点・配慮点について自由記述で回答を求め、体得したことについて傾向を分析した。

(1) 頻出語の抽出

「実際、0. 1. 2歳児の子どもと「ふれあい遊び」を実践し、どのようなことを体得したか」の学生記述について、頻出語の使用頻度を把握するため、出現数を算出した（3回以上）。39語が分析の対象となった。表2が「抽出された頻出語と出現回数」である。出現回数が40回を超えている語は、「子ども」の46回が最も多く、続いて「遊び」が31回、「感じる」については22回であった。その他、出現回数が多かった語は「思う」「楽しむ」「関係」「大切」「触れ合い」「信頼」であり、いずれも10回を超えていた。

表2. 抽出された頻出語（39語）と出現回数（3回以上）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	46	信頼	10	スキンシップ	5	伝わる	4	実感	3
遊び	31	行う	9	関わる	5	動き	4	実習	3
感じる	22	築く	8	言葉	5	分かる	4	取る	3
思う	19	コミュニケーション	7	改めて	4	目	4	縮まる	3
楽しむ	17	自分	7	距離	4	愛着	3	笑顔	3
関係	14	保育	7	見る	4	安心	3	体	3
大切	13	出来る	6	時間	4	学ぶ	3	表情	3
触れ合い	11	様子	6	声	4	自身	3		

(2) 共起ネットワーク分析

「実際、0. 1. 2歳児の子どもと「ふれあい遊び」を実践し、どのようなことを体得したか」についての共起ネットワーク分析が図6である。大きく8つのグループがあることが分かった。円の大きさと抽出語の出現回数の目安が図の右側に示してある。

分析の結果、01のグループでは、円の大きいものから「大切」「触れ合い」「コミュニケーション」「保育」

「スキンシップ」「言葉」「学ぶ」「実感」「取る」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「触れ合い遊びを通して、私がかかる言葉や表情に笑顔返してくれるだけで、私もまた笑顔になり、嬉しさを実感した。」「触れ合い遊びはスキンシップをとったり、目と目を合わせて一緒に楽しんだり、1対1で関われる大切な遊びだと感じた。」「まだ自分で言葉を発することのできない乳児であっても、保育者が進んで言葉をかけながらコミュニケーションをとって、触れ合うことの楽しさを共感することが大切だと思った。」「音に合わせて揺れたり動きをすることは、子どもにとっても保育者にとっても大切な触れ合いの時間なのだと感じた。」などの記述があり、ふれあい遊びを通して、子どもと保育者は、楽しさや嬉しさ、表現することの面白さを共有し、互いによい影響を与えることを意図する内容が確認されたため【共感性の相乗効果】と名付けた。

02のグループでは、円の大きいものから「思う」「楽しむ」「自分」「伝わる」「分かる」「自身」「笑顔」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「自分自身が楽しむことで、その気持ちがちゃんと子どもにも伝わり楽しさを共有することができると実感した。」「何回か触れ合い遊びをしたが、初めて触れ合い遊びをしたため最初は緊張してしまっていたがだんだん慣れ、自分がまずは楽しむことで子どももより楽しめると分かった。」「自分自身が楽しみ笑顔で元気に行くと、子どもたちにも伝わるのだと分かった。」「自分自身も子どもと楽しみながらできたので、子どもも私が楽しんでいるのを感じてさらに楽しむかなと思った。」などの記述があり、ふれあい遊びは、自分自身が楽しみ喜ぶことで、子どもも楽しむことを意図する内容が確認されたため【自己喜楽の重要性】と名付けた。

03のグループでは、円の大きいものから「距離」「時間」「実習」「縮まる」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「子どもとの距離が縮まって、遊びを誘ってくれたり抱きついてきてくれて可愛いと感じた。」「初めて会う実習生に対して、緊張していたと思うのですが、ふれあい遊びをすることで、距離も縮まり、その姿をみた他の子どもたちも実習生に対して怖い気持ちも小さくなるのではないかと思います。」「ゆったりとした触れ合いや優しい歌の触れ合い遊びは、子どもと心を縮めることができると感じました。」「私のすることに対しての反応がとても可愛かったです。時間と共に子どもとの距離が縮まり嬉しかったです。」などの記述があり、ふれあい遊びを実践する中で、「子どもが可愛い」と思う感情を意図する内容が確認されたため【実践体験からの好意感情】と名付けた。

04のグループでは、円の大きいものから「出来る」「関わる」「目」「安心」「体」「表情」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「子どもが自分の膝の上などに来てくれた時に歌を歌いながら、膝や体を動かすだけでも子どもは楽しんでいる様子で、私に対し安心感を持ってきているからこそ楽しめることだと思った。」「優しい表情でスキンシップをとること、子どもの要求に応え関わるのがとても大切だと実感した。」「優しく言葉かけをし、表情豊かにしながら身体に触れ合うことで、子どもたちは安心してふれあい遊びを楽しむことが出来るのだと感じた。」「午睡時、体をさすりながら触れ合い遊びを実践してみた。すると、楽しそうに笑い、もう1回と何度も要求され、やっていくうちに疲れたのか眠そうになり、安心した表情で布団に横になっていた。」などの記述があり、ふれあい遊びを通して、愛情豊かに、応答的に行わたことの重要性を理解したことを意図する内容が確認されたため【情緒応答的関わりの習得】と名付けた。

05のグループでは、円の大きいものから「行う」「改めて」「愛着」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「子どもたちとふれあい遊びを通して、愛着関係、信頼関係を得るきっかけとなることが改めて理解できた。」「ふれあい遊びを通して、子どもとの愛着関係や信頼関係を築くことができるのだと実際に行ってみて感じました。」「ふれ合い遊びを通して子どもとの距離が縮まったように感じ、身体感覚を発達させるだけでなく、保育者との愛着関係を作るためにも触れ合い遊びは大切だと改め

て学びました。」などの記述があり、ふれあい遊びを実践体験し、授業での学び「愛着形成の重要性」について理解を深め、再認識したことを意図する内容が確認されたため【体験的再認識】と名付けた。

06のグループでは、円の大きいものから「様子」「見る」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「アイコンタクトをする度に笑顔を見ることができて、目線を合わせることの重要性をあらためて感じた。」「子どもたちは同じことを繰り返すことが楽しいと感じている様子だった。1回だけでなく何回もそのふれあい遊びをすることで「楽しい！もっとやりたい」と感じている様子だった。」「ふれあい遊びをするとき、していると時の子どもの様子をよく見ることの大切さを感じた。」などの記述があり、ふれあい遊びを通して、子どもの目線に立つことの大切さについて理解したことを意図する内容が確認されたため【子ども目線の理解】と名付けた。

07のグループでは、円の大きいものから「声」「動き」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「触れ合い遊びをするときにどのような配慮が必要なのか、子どもたちが楽しいと感じることができるようにするには、声のトーンや抑揚、体の動きなどいろいろ試し、その子に合ったものを行うことが大切だと学びました。」「周りの物に気をつけ、声のボリュームなどを考えて行うこと。」「触れ合い遊びは、声の抑揚の付け方や動きの変化をつけ、小さな動作ではなくもっと大きな動作で行うべきであったと感じた。」などの記述があり、子どもとふれあい遊びを楽しむ時の声のトーンや抑揚、ボリューム、動きの変化など表現技法を習得したことを意図する内容が確認されたため【表現技法の習得】と名付けた。

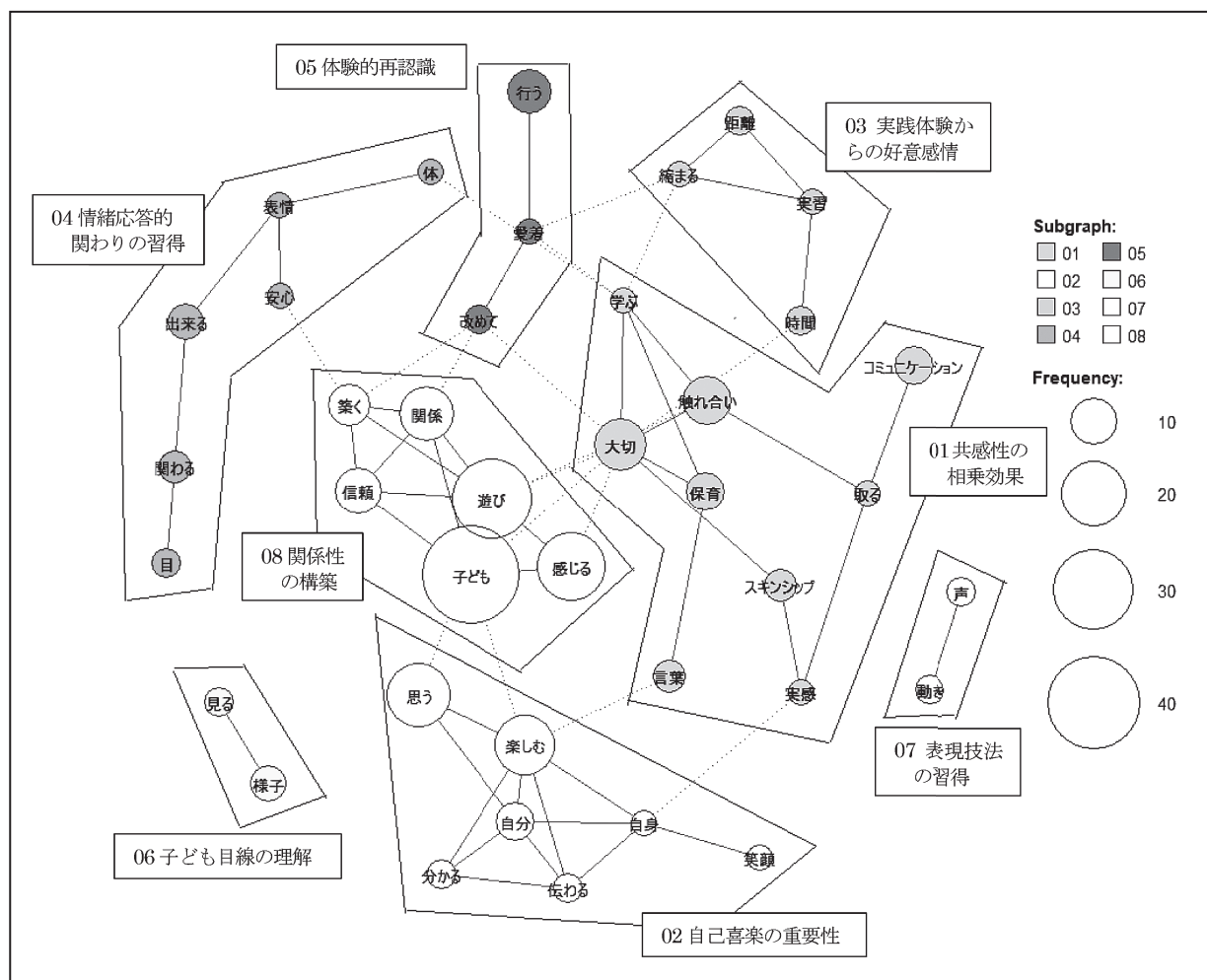


図6. 「ふれあい遊び」を実践体験して体得したことを示す共起ネットワーク

08のグループでは、円の大きいものから「子ども」「遊び」「感じる」「関係」「信頼」「築く」などの語が含まれていた。これらの文章を見ると、「ふれあい遊びをすることで、子どもの方から実習生の方に来るようになった。時間は短いものの、信頼関係を築く上で大切なことだと感じた。」「触れ合うことは、信頼関係へと繋がる1歩だと思った。」「スキンシップを取りながらの触れ合い遊びは、子どもとの信頼関係が築くと実感した。」「1対1で関わることができるので、子どもと信頼関係を築いたり、コミュニケーションを図ったりすることができると思う。」「子どもが玩具などに飽きてふと近寄ってきた時にふれあい遊びを行うと、喜び、子どもとの間で信頼関係が築く思った。」などの記述があり、ふれあい遊びを通して、子どもとの関係性を築くことができることを意図する内容が確認されたため【関係性の構築】と名付けた。

「乳児保育Ⅱ」の授業での学びを通し、保育実習Ⅰ（保育所）の0.1.2歳児クラスにおいて「ふれあい遊び」を実践し体得したことは、第一に「ふれあい遊び」を実践する時は、自分自身が楽しみ、声のトーンや抑揚、ボリューム、動きの変化をつけるなど表現方法の工夫が必要になること。また、子どもの目線に立ち、様子や反応をみつつ、「ふれあい遊び」を一緒に楽しむことについて、体験的に学ぶことができたのではないかとと思われる。第二に子どもが喜んだり、楽しんだりする姿を体感することにより、「子どもが可愛い」という好意的な感情を味わい、また、優しい表情で愛情豊かに、応答的に関わることの意味を知るきっかけとなる。さらに、様々な授業で学んだ「愛着形成」の重要性についてより深く理解できたのではないかと推測される。第三に実践した「ふれあい遊び」を通し、子どもと保育者の信頼関係の構築へつながることについても体得できたのではないかとと思われる。これらのことから、「ふれあい遊び」の実践体験は、保育を志す学生にとって価値あることであると示唆された。

Ⅵ. まとめと課題

今回の調査において、「ふれあい遊び」を保育実習Ⅰ（保育所）で実践し、学生が体得したことについてKHCCoderで分析した結果、【共感性の相乗効果】【自己喜楽の重要性】【実践体験からの好意感情】【情緒応答的関わり方の習得】【体験的再認識】【子ども目線の理解】【表現技法の習得】【関係性の構築】の8つの項目で示すことができた。これらの項目については、「ふれあい遊びを実践し体得したことについて」の記述回答だけでなく、その他「子どもの様子や反応について」「子どもへの配慮や留意点について」「感想」などの自由記述回答からも非常によく読み取れた。「ふれあい遊び」を実践した60%の学生については、これらのことを体験的に習得できたが、一方で、40%近くの学生は今回の保育実習Ⅰ（保育所）で体験しなかった。この結果からも、今後予定される保育実習Ⅱ(保育所)において、乳児保育教科担当として0.1.2歳児クラスでの配属を促し、「ふれあい遊び」の意義も踏まえて実践体験するよう進めていく必要があると考える。

授業内容については、2年次前期開講の「乳児保育Ⅱ（演習）」だけでなく1年次後期の「乳児保育Ⅰ（理論）」の授業においても、継続的に学生が「ふれあい遊び」に興味をもてるような授業展開を検討していくことが課題である。乳児保育の基礎知識として「乳児保育Ⅰ（理論）」の中で、乳児の心、言葉及び体の発達について教授する。これらの授業回においても、理論から演習につなげ「ふれあい遊び」について、紹介したり、実践したりする機会を設けるなど、学生が主体的に学び合えるよう授業方法についての見直しも必要であると思われる。

最後に、0.1.2歳児クラスでの「ふれあい遊び」は、実際の保育現場において保育者が一斉活動として計画的に取り入れる場合もあるが、ほとんどの場合は一斉活動として行うものではなく、時間や場

所を設定せずに自由遊びや生活の流れの中で、子どもが保育者に一对一の触れ合いを求め、膝の上に座ったり、抱っこしてきたりした際にする遊びである。学生の中には、実習において遊びや活動を行う時は、指導計画案を作成し計画的に行わなければならないという思い込みのあるものも少なくない。乳児保育教科担当として、0.1.2歳児クラスでの保育内容や子ども主体の保育について、しっかりと教授していくことが今後の課題となるであろう。

謝辞

本研究にあたり、たくさんの質問項目でありながら丁寧に回答してくださった学生の皆様、また、写真の掲載について承諾していただきました愛泉こども園の皆様、学生の皆様に感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 1) 久津摩英子『ふれあいたっぷり！赤ちゃんのわらべうたあそび』チャイルド本社、2013
- 2) 遠藤 晶「1歳児と保育者のふれあい遊びにおける共感的相互作用の事例研究」『武庫川女子大紀要（人文・社会学科）』2016 64、1-10
- 3) 佐々木綾子「親性準備性尺度の信頼性・妥当性の検討」『福井大学医学部研究雑誌』2007 8、41-50
- 4) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版、2014、pp. 1-233
- 5) 山本直樹・下川涼子・渡邊望「保育者養成校の演劇表現指導における「劇遊び」の活用の意義と課題－受講生の振り返り記述の計量テキスト分析による検討－」『保育文化研究』第12号、2021、pp. 37-49
- 6) 山内信子・持田葉子「幼児の「表現する過程」を読み取る保育者の養成－身の回りの音に着目した授業実践の検討」『保育文化研究』第14号、2022、pp. 95-106
- 7) 厚生労働省 編『保育所保育指針解説 平成30年3月』フレーベル館、2018、pp. 156-167
- 8) 遠藤 晶・松山由美子・内藤真希「幼児の異年齢集団によるふれあい遊びにおける相互行為の検討」『武庫川女子大学紀要』第58集、2010、pp. 23-31
- 9) 遠藤 晶・江原千恵・松山由美子・内藤真希「ふれあい遊びにおける双方向性」『武庫川女子大学大学院教育学研究論文集』6号、2011、pp. 21-29
- 10) 藤田浩子『ふれあいあそび ギュッ』一声社、2001
- 11) 塩野マリ『0・1歳児のふれあい歌あそび』ひかりのくに、2001
- 12) 阿部ヤエ『「わらべうた」で子育て 入門編』福音館書店、2002
- 13) 阿部ヤエ『「わらべうた」で子育て 応用編』福音館書店、2003

資料1. 乳幼児への好意感情と保育実習「ふれあい遊び」に関するアンケート

— 保育実習前調査 —

【質問1】 以下の1～9の項目について、1(全くそう思わない)・2(あまりそう思わない)・3(どちらともいえない)・4(ややそう思う)・5(とてもそう思う)の回答のうち、当てはまるもの1つに○をつけてください。

- 1) あなたは赤ちゃんが好きですか。
- 2) 赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか。
- 3) 赤ちゃんのことにについて知りたいと思いますか。
- 4) 赤ちゃんに関心がありますか。
- 5) 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか。
- 6) 赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしますか。
- 7) 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか。
- 8) 赤ちゃんの世話をすることが好きですか。
- 9) 赤ちゃんに興味がありますか。

— 保育実習後調査 —

【質問1】 以下の1～9の項目について、1(全くそう思わない)・2(あまりそう思わない)・3(どちらともいえない)・4(ややそう思う)・5(とてもそう思う)の回答のうち、当てはまるもの1つに○をつけてください。

- 1) あなたは赤ちゃんが好きですか。
- 2) 赤ちゃんを見ると「かわいいな」と思いますか。
- 3) 赤ちゃんのことにについて知りたいと思いますか。
- 4) 赤ちゃんに関心がありますか。
- 5) 赤ちゃんと一緒に遊ぶことが好きですか。
- 6) 赤ちゃんを見るとあやしたり笑いかけたりしますか。
- 7) 赤ちゃんを抱いてみたいと思いますか。
- 8) 赤ちゃんの世話をすることが好きですか。
- 9) 赤ちゃんに興味がありますか。

【質問2】 保育実習Ⅰ(保育所)について質問します。

- 1) 保育実習Ⅰ(保育所)での総日数をお答えください。
- 2) 保育実習Ⅰ(保育所)で、0, 1, 2 歳児クラスに何日配属されたかお尋ねします。配属されたクラスの日数をお答えください。
 - ① 0 歳児クラス
 - ② 0, 1 歳児クラス
 - ③ 1 歳児クラス
 - ④ 2 歳児クラス

【質問3】 保育実習Ⅰ(保育所)における「ふれあい遊び」について質問します。

- 1) 保育実習Ⅰ(保育所)で、「ふれあい遊び」を0, 1, 2 歳児の子どもと実践したかどうかお答えください。
「実践した」⇒ 2) について回答ください。「実践しなかった」⇒ 3) について回答ください。
- 2) 保育実習Ⅰ(保育所)で、「ふれあい遊び」を0, 1, 2 歳児の子どもと「実践した方」にお尋ねします。①～⑤の質問にお答えください。
 - ① 実践したふれあい遊びは、実際の子どもの月齢・年齢にあっていましたか。「はい」「いいえ」でお答えください。
※「いいえ」とお答えした方、どのような点が月齢・年齢にあっていなかったのかお答えください。(記述式)
 - ② 「ふれあい遊び」を実践する時、どのようなことに配慮や留意したかお答えください。(記述式)
 - ③ 「ふれあい遊び」を実践した時の子どもの様子や反応についてお答えください。(記述式)
 - ④ 実際、0, 1, 2 歳児の子どもと「ふれあい遊び」を実践し、どのようなことを体得したかお答えください。(記述式)
 - ⑤ その他 実践してみて感想など自由にお書きください。(記述式)
- 3) 保育実習Ⅰ(保育所)で、「ふれあい遊び」を0, 1, 2 歳児の子どもと「実践しなかった方」にお尋ねします。
実践しなかった理由について、該当する項目に○を付けてください。(複数回答可)
 - 「0, 1, 2 歳児クラスに配属されなかったため」
 - 「クラス担任保育者にお願ひできなかったため」
 - 「コロナ禍で、必要以上に子どもと密着することができなかったため」
 - 「人見知り時期の子どもが多く、なかなか一歩踏み出せなかったため」
 - 「自分の表現力やコミュニケーション力に自信がなかったため」
 - 「保育者の前で実践することが、ただ単に恥ずかしかったため」
 - 「調べたふれ合い体操が、配属クラスの月齢や年齢に適していなかったため」
 - 「その他」